

インパクト志向金融宣言

Japan Impact-driven Financing Initiative

第 2 回ワーキングレベル会合が開催されました

インパクト志向金融宣言の第 2 回ワーキングレベル会合が、2022 年 4 月 20 日(水)10:00~12:00 に、オンラインとリアルなハイブリッド形式で開催されました。当日は、署名機関 25 社、署名予定機関 2 社、国内の賛同機関の 3 団体に加え、本宣言への加盟を検討中の 2 社のオブザーバーを含む、計 66 人が参加しました。



第 2 回ワーキングレベル会合では、新規参加予定機関・運営委員の紹介、運営委員会からの報告、自由議論、今後の予定共有を行いました。

1. 新規参加予定機関・新運営委員の紹介

2022 年 4 月 1 日付けで署名した住友生命保険相互会社並びに、5 月 1 日付けで署名予定のクラウドクレジット株式会社より、本イニシアティブへの期待やインパクトファイナンスに関連する自社の取り組みなどについて、コメントを頂きました。

また、第一生命保険株式会社石井博子氏の後任として新しく運営委員となった同社の岡崎健次郎氏より、ご挨拶を頂きました。

2. 運営委員会からの報告・議論

インパクト志向金融宣言では、イニシアティブ全体の活動を推進していくために運営委員会を設置し、2 月 21 日に初回会合を開催、以降月次で定期会合を実施しています。

運営委員会でのどのような議論を行ってきたかを署名機関・賛同機関に共有するため、まずは事務局より過去 3 回開催された運営委員会での議論内容の概要を説明しました。続いて、直近で開催された第 3 回運営委員会(4 月 18 日)で議論した、①「インパクト投資に関する勉強会」との整理や運営委員会と WL 会合の役割の違いの整理、②インパクトファイナンスの定義に関する議論、③本イニシアティブの戦略・TOC、④1 年度のプログレスレポートの内容、⑤具体的な活動計画について、共有しました。(資料 1 参照)

続いて、運営委員会委員長である三井住友トラスト・ホールディングス株式会社の金井司氏よりコメントを頂きました。まずプログレスレポートの発行時期については、できるだけ早く活動を進めていくためにも、現時点から1年後ではなく宣言発足時(2021年11月)から1年後を目指していくことや、目標時期を定めたいうえでバックキャスト的にやるべきことを整理していくということについて、運営委員で合意したことをご説明しました。また、分科会の重要性を挙げ、今後個別の活動の中心は分科会になっていくため、署名機関・賛同機関はぜひ分科会に参加して活発な活動をしてほしいとの期待を述べました。

運営委員会副委員長のりそなセットマネジメント株式会社松原稔氏からもコメントを頂きました。プログレスレポートについては、ベストプラクティスを積み上げるというよりは、各署名機関がどのようなプランをもって活動を進めていくかという発想で、各署名機関それぞれの特徴を生かしてユニーク性をつなぎ合わせていくことが重要ではないかとの見解を述べました。また、分科会の役割が大きくなっていき、各分科会で得られた知見が別の分科会とも連携され、全体の底上げにつながっていくだろうと述べ、本宣言での活動が、インパクト志向を目指していくうえでのプラットフォームになるとの期待を寄せました。

また、事務局の安間氏から、運営委員会で議論してきた本宣言の戦略(資料1, P12)について、IMMを伴うインパクトファイナンスの個別事例を積み上げることで金融機関の業務全般におけるインパクト志向の実現につながっていくというボトムアップの考え方と、インパクト志向経営というトップダウンのイニシアティブの両方の流れを包含する戦略であるという点を説明しました。また、インパクト志向金融の実現に向けては、金融機関の価値創造プロセスの変革も必要になってくるとの見解を述べました。

3. (運営委員会報告を受けての)議論

運営委員会からの報告の後、参加者で議論を行いました。運営委員会参加メンバーや署名機関から、以下のように、今後の具体的な活動に向けて積極的なご意見・コメントが挙がりました。

【活動全般について】

- ✓ 本宣言は実務でインパクトファイナンスに取り組む金融機関の集まりなので、分科会においても自社のIMMの取組み事例やインパクト創出のベストプラクティスを共有し、参加機関間で議論をしていきたい
- ✓ 本宣言のセオリー・オブ・チェンジ(TOC)を見たときに、ビジョン、ミッションを達成するために自身の金融機関で何ができるか、何が必要かといった視点で取組みを検討していくと良いのではないか

【投資先に関する活動/裾野を広げる活動について】

- ✓ 投資先企業にどのように働きかけ、企業価値向上の道筋やKPI設定、エンゲージメント方法を考えていくのかといった事例やベストプラクティスを、複数の金融機関間で共有するというのが、本イニシアティブの大きな役割になるのではないか
- ✓ インパクトと言っても投資先企業によってグラデーションがあり、もともとインパクトドリブンで立ち上がった企業もあれば、インパクトは意識していなかったけれども実際は地域に貢献しているような企業もある。前者はIMMの手法を提供して企業価値につながっていく一方で、後者はインパクトファイナンスの機会を通してはじめて、自社の社会的価値や地域への貢献を認識できる場合もあり、投資先企業が事業を見直すきっかけにもなるのではないか

- ✓ インパクトファイナンスの裾野を広げていくために、IMM をどの程度までやっていくかといった議論も行っていきたい。導入企業に適した方法を示し、誰もが取り組みやすいものになっていくと良い
- ✓ ベストプラクティスを北極星として発信していくことは重要である一方で、皆がインパクトを目指す世界観を目指していくのであれば、差別化という視点ではなく「はじめの一歩」を踏み出せるような情報発信をしていけると良いのではないか
- ✓ インパクトファイナンスは、需要サイド(投資先企業)にも意志がないといけないため、金融機関として、事業者側にも参考になるようなプラットフォームを作り発信していけると良い

【インパクト志向金融の推進について】

- ✓ 経営へのインパクト志向の取り込みにおいては、統合思考における価値創造プロセスが重要となってくる。価値創造プロセスはロジックモデルの形をベースにしつつ Capitals(資本)を含んでおり、企業経営をとおして資本の価値をいかに高めていくかという考え方。金融機関自身の価値創造プロセスを問うとともに、インパクトファイナンスには、投資先企業の価値創造プロセスをレベルアップするという役割もある

【インパクトファイナンスの定義について】

- ✓ インパクトファイナンスの定義は広いため(資料 1, P9)、人によってイメージするものも異なるし、特に最終アセットオーナー(個人投資家)にとっては理解が難しく、インパクト志向の金融を広げていく際の妨げとなっている可能性があるため、P11 のようにグラデーションで分類していくと、より分かりやすくなっていくと考える
- ✓ 特にアーリーステージ企業への投資の場合は、最上級の IMM を導入するハードルが高いため、グラデーションの分類を用いて、導入企業のステージ等に適した方法について、本イニシアティブで事例を出していけると、誰もが取り組みやすくなっていくのではないか
- ✓ IMM を伴わないけれどもインパクトを想定しているような、インパクトファイナンスの一步手前といえる投融资についても、検討に含めていく。特に、IMM のマネジメント部分について、グラデーションを検討していきたい(事務局)
- ✓ 関心のある金融機関は、事務局の議論と一緒に参加して頂きたい(事務局)

【IMM の実践について】

- ✓ リスク・リターンの側面だけではなく、インパクトについても可視化していきたいと考えており、分科会を通して事例の共有や、KPI 設定の標準化などに取り組んで行けると良い
- ✓ IMM の実践を開始したところであり、自社の取組みを共有していきたい
- ✓ インパクトの評価を、評価のためにやるのではなく、インベスター・コントリビューションの視点で、投資先へのファイナンスやエンゲージメントが投資先の事業にどのように影響しているかを測っていくことが問われている。自社のベストプラクティスや取組みを共有しつつ、参加機関で議論をしていきたい

- ✓ 投資先の事業を深く理解し、利益を最大化していくことを考えると、インパクト KPI の設定や IMM は必然的に求められてくることである。自社の取組みも共有しつつ、議論をしていきたい

【国内外への発信や海外連携について】

- ✓ 本宣言はさまざまなアセットクラスが集まっていることが特徴であるため、経営レベルでのインパクト志向金融の推進を発信していくとともに、現場レベルでの実務の側面も深堀し、ケーススタディやベストプラクティスを発信していくことが重要ではないか
- ✓ プログレスレポートについては、GSG 国内諮問委員会の年次レポートとの色分けが重要ではないか
- ✓ 本宣言のような、金融機関横断型のイニシアティブは、世界でも類似事例がなく日本が先行しているのであれば、海外に対する発信というスコープも視野に入れたほうが良いのではないか
- ✓ (上記発言に関連して)、例えば 10 月にハーグで開催される予定の GIIN のインベスターフォーラムや、他の国際的なイベントで本宣言のインパクト志向経営について発信していくという可能性も踏まえ、グローバルなムーブメントにどう参加していくかについては引き続き議論していきたい
- ✓ 当初からインパクトを志向する企業として発足している機関もあれば、特に大手の伝統的金融機関の場合は、インパクト志向を目指していく過程で経営の変革(Transformation)が必要とされる。このような変革の事例についても、世界に発信していく価値があるのではないか
- ✓ 海外の開発分野のベストプラクティスを提供していきたい。ヨーロッパ各国の DFI には IMM のコストシェアリングを実施しており、インパクトエコシステムの作り方が参考になる
- ✓ 国際的なネットワークを持つため、日本のインパクト投資を世界に発信していくときに、ぜひネットワークを活用していただきたい

【アセットクラス毎の活動について】

- ✓ 様々な地域の地域金融機関が集まっているため、金融機関横断的に、①:知る・つながる、②:広める・しらせるといった活動を推進し、地域の中小企業へのファイナンスを通じた地域インパクトの創出について議論を行っていきたい
- ✓ アセットオーナーとして、他のイニシアティブとも連携しつつ、インベストチェーン全体を巻き込むような活動を推進していきたい

4. 今後の予定

- ✓ 分科会の立ち上げについては、署名機関にアンケートを通して希望を伺ったうえで決定する
- ✓ プログレスレポートは 12 月～1 月をめどに発表予定だが、残高は 9 月末時点での数字とする予定

資料:

- 1.第 2 回ワーキングレベル会合資料(別添)

以上